

Cutting-Edge

[カティング・エッジ]

Move この人にきく

工学技術へのお誘い

身近なところであって女性の極端に少ない世界、それは技術者の世界です。科学者、研究者の世界には女性もだんだん増えてきて、分野によってはすでに大きな発言力を得ています。ところが技術者、特に機械とか土木といった分野では本当に少ない。例えば4万人も会員がいる日本機械学会は、ロボット、新幹線、自動車から医用機器、ナノ工学まで含む技術者・研究者団体ですが、たった3%前後の女性会員しかいません。「Cutting-Edge」は書誌情報ということですが、普通の書物のなかに、女性科学者像はあっても女性技術者像が描かれているものが無いのは不思議に思われます。

実際の経済・社会は、科学ではなく技術で動いています。残念ながら経済パワーの方が影響は圧倒的なのですが、実は経済社会を支えているのは技術パワーの成果です。本によれば、ローマ時代は技術とか芸術は奴隷の仕事だったとありますが、現在はその技術や芸術が主役の社会になっています。ドレイのはずのコンピューター・ネット技術は、主人のはずの経済活動の仕組みを大変革しつつあります。社会で重きをなそうと思ったら、技術を支配しなくてはならないのです。

その技術者の世界に女性が少ないのはなぜでしょうか？ 重い、油で汚い、固いといったイメージをお持ちの方もまだあるでしょう。現在では、技術者の職場も激変しました。大学の研究室よりもずっと居心地がよくなり、重いものを扱うことはなくなりました。“か弱い”男性でさえ可能な職場に変身しています。ましてや強い女性なら…。職場にハードは減ってソフトに占領される時代です。“もの”は男女差や出身国差や年齢差を区別しません。そしてまた現実の技術は興味津々たる面白い課題に満ちています。

工学技術を学んだ人は、技術者になるだけでなく、企業経営者にも議員やマスコミにも必要です。図書館でも病院でも市役所でも、新しい通信機能や介護機器や廃棄物処理設備の導入にあたって、本当に内容と将来予測を理解して決定を下せる人はどのくらい居るでしょうか。広い意味の公益技術者は、女性も大いに進出すべき新世界です。

女性が技術の分野にも進出することは、健全な社会の発展に不可欠のことであると思います。女性技術者が増えるには、女性で工学系の大学へ進学する人が増える必要があります。その前提には、親が、特に女性の立場をより深く考えるはずの母親こそが技術者の担う役割への理解を深める必要もあるでしょう。書誌は書物が存在することが前提ですが、書物のほとんど無いフロンティアを切り拓く方々の出現を期待しています。書誌情報にも、新しい女性技術者像が続々と現れる時代を私たちが作り出していきたくと考えます。



CONTENTS

Move この人にきく…………… 1P
 Books ジェンダー最前線…………… 2, 3P
 Information…………… 4P



横浜国立大学理事・慶応義塾大学名誉教授

長島 昭
(ながしま あきら)

未来・ことば

学問分野を明確な複数の領域に分割することは、たとえそこに明確な(つまり「適切な」)目的やアイデンティティがあっても、ジェンダー、人種、セクシュアリティが相互に構築し構築された手法を概念化し、取り組むことを可能にする理論または戦略を、前進させるのではなく実は阻害することになりかねない。

アン・ペレグリーニ

(リサ・ブルーム編『視覚文化におけるジェンダーと人種—他者の眼から問う』彩樹社、2000年)

ムーブ叢書 ジェンダー白書5 女性と経済



- 大沢 真理、竹信 三恵子、ダイアン・エルソン、大崎 麻子、伊藤 あり、鹿嶋 敬、森ます美、若森 章孝、菊地 英明、松井 彰彦、ワグラー・マータイ、永田 えり子、仲正 昌樹、小林 洋幸、力武 由美 著
- 明石書店
- 2007年初版
- 2,400円(税別)

企業収益が上向き、景気が回復したといわれる今ようやく、小泉政権の新自由主義的経済政策が国民生活に与えた影響が、如実に明らかになってきた。本書は、格差拡大や福祉切捨てなどの今日の問題が、なぜどうして生まれ、ジェンダー平等とどのような関連性を持っているのかを知る上で非常に有益である。大沢真理氏の総論では、「『男性稼ぎ主』型の生活保障システム」が経済グローバル化のもとでは「機能不全というよりは逆機能を果た」していることが指摘され、森ます美氏の論考では、「21世紀に入って以降、男女の経済的自立を保障する就業と収入の確保は困難さを増し、階層間の経済格差が拡大する中で男女共同参画社会の基盤は強化されるどころか、むしろ脆弱化している」ことが指摘されている。また、伊藤あり氏の論考では、香港を事例としてアジア社会における家事労働者の「国際移転」が論じられている。この他、「非正規雇用の蔓延」(鹿嶋敬氏)や「社会的排除」(菊地英明氏)など、新自由主義的な政策がもたらした問題

が深く掘り下げられている。どう乗り超えていくべきか、本書の各論考に描かれた政策・意識・文化など多様な観点からの方策を手がかりに、真剣に問われるべきであろう。

ジェンダー予算

国や地方自治体の予算などの財源からなる予算を、ジェンダー平等の観点から分析する手法。1980年代半ばから、オーストラリア・南アフリカ等の国々で、ジェンダー平等政策を実行に移すための手段として実施されてきた。本書収録の大崎麻子氏の論考に、詳しい説明がある。ジェンダー予算は、「ジェンダーに中立的」と考えられがちな「予算編成プロセス」自体に、成人男性の視点を優先するジェンダーバイアスが働きがちであるゆえに、必要だという。たとえば公共支出の削減は、女性の無償労働時間の増大と有償労働時間の削減をもたらしがちである。ジェンダー予算は、こうしたジェンダーによって偏った支出削減の影響なども、分析していく。

えはら ゆみこ
江原 由美子(首都大学東京教授)

おきなわ女性学事始

この本は、あらん限りの食材で作ったチャムプルーのように多様な味がする。それもそのはず、「おきなわ女性」とは、「一つの場合からもう一つの場合へと移動することによって」周囲との差異が生じるそのつど、「陽炎のように立ち現われるもの」らしいのだ。よって著者(本土とアメリカで暮らしたことのある沖縄出身の文学者)は、「おきなわ女性」を描くためにあらゆる分野を横断する。伝統的祭祀を司る女性、「日本化」教育を受けた近代の「新女性」、米兵による少女暴行事件、アメリカ人類学者による沖縄の表象、沖縄出身作家の小説—著者の手法はプリコラージュ(とりあえずの仕事)、浮かび上がるのは「おきなわ女性」のコラージュである。

本書の貢献は二点ある。一つは、井波普猷や柳田国男をはじめ男性研究者中心に進められてきた沖縄研究に、研究主体としての「おきなわ女性」を登場させたこと。もう一つは「日本女性」中心に進められてきた国内の女性学に、エス

ニシティの視点を導入したことである。男性や欧米人だけでなく、「日本女性」もまた「おきなわ女性」を対等視してこなかったのではないかと考えさせる、インターナル・コロニアリズム研究の好著。

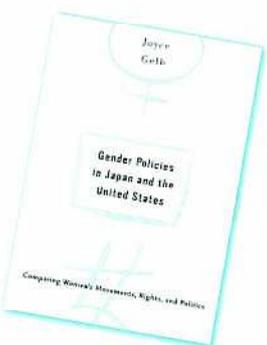
インターナル・コロニアリズム (internal colonialism)

一つの国家の内側で再生産される、植民地的な社会・経済・政治関係。ここでいう「コロニー」とは、国内で従属的な位置に置かれた一部住民を指し、通常、民族的マイノリティ(しばしば先住民も含む)を指す。かつて宗主国のエリートが植民地の全住民を支配したのと似た仕組みで、国内植民地主義は、国内の支配的民族がマイノリティに労働力・資源・その他のサービスを提供させる。「植民」を広い意味で使うならば、たとえば合衆国における白人と黒人の状況にも適用される。

かとう えつこ
加藤 恵津子(国際基督教大学准教授)



- 勝方=福福 恵子 著
- 新宿書房
- 2006年初版
- 2,800円(税別)



- Joyce Gelb 著
- Palgrave Macmillan
- 2003年初版

Gender Policies in Japan and the United States: Comparing Women's Movements, Rights and Politics (仮邦訳『日本とアメリカのジェンダー平等政策比較研究—女性運動・権利・政治』)

本書は、アメリカと日本における80年代以降の女性運動に焦点を当て、「女性の『行為体』がジェンダー平等政策に与えた重要なインパクト」、さらには「文化と政治という二つのシステムにおけるジェンダーの政治性」を比較分析している。両国の女性たちが法制化に向けて行動してきたフェミニスト課題は、「雇用の機会均等」「DV」「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」「ワーク・ライフ・バランス」などである。特に近代的避妊医療技術へのアクセス権を求めて、アメリカの女性団体は早くから声を上げてきたのに対し、日本ではその権利を求める声は90年代になってようやく上がりはじめるなど、ジェンダー平等に向けて女性団体が取り組む状況は日米間で違いが見られる一方、運動の「行動戦略」においては類似性が見られるという。

特に結論の最終章は本書の中でもきわめて刺激的である。「フェミニスト政策の策定に女性運動の主張を中心に据えること、さらには個々の女性政策を一体化させること」を協調す

ることによって、エイミー・マズールのように女性の行動主義が政策決定に与えるインパクトを軽視する最近のフェミニスト研究に挑戦している。

フェモクラット (femocrat)

英語の feminist と bureaucrat から成る造語で、「フェミニスト官僚」のことを言う。「フェミニズム第二波」のうねりの中、70年代にオーストラリアとニュージーランドで生まれた。フェモクラットは、家長制的な官僚主義の権力構造にはめ込まれてしまった女性官僚だとして、アンチ・フェミニストからもフェミニストからも軽蔑されてきた。しかし、Gelbの分析が示すように、日本とアメリカの女性運動がフェミニストの視点を政策決定の場へ持ち込むことに成功したのは、システム上、戦略上、フェモクラットの存在があったからである。Gelbは日本のジェンダー平等政策が推進された背景には、フェモクラットの卓抜した能力があると評価している。

山本ベバリー・アン(大阪大学大学院人間科学研究科講師)

男らしさの社会学—揺らぐ男のライフコース

伊藤公雄「男性学入門」から10年、新人類世代の教育社会学者による新しい男性学入門。男性を「ジェンダー化された存在」つまり《男にされている男たち》と捉え、学校生活から会社生活、そして定年後までのライフステージにおいて、男はどのようにして男になり、どのような男として生き、どのような問題に直面しているのかを、「男性の制度的特権」「男らしさのコスト」「男性内の差異と不平等」という視点から、ていねいに分析している。

第1章では、英語圏の研究も見据えながら、日本における男性学の歴史を振り返って、男性学が多様化しながら「男性性」というキーワードを発見してきたプロセスをたどる。第2章では、学校教育のなかで、勉強やスポーツ、仲間集団のなかで、少年が「男性性」を身につける構子が明らかにされる。第3、4章では、青年期のジェンダー構造の分析を通して、男にとつての「大人」の意味が問われる。第5章では、企業社会における男性支配、特に男性組織の中の男性同士の格差と差別が分析される。第6章では、父親としての男性に

注目し、男たちの育児に対する意識と行動に光が当てられる。第7章は、定年後に男たちが直面するアイデンティティ危機の分析。第8章は、日本の男性運動の歴史をたどり、将来への課題を探る。全体を通して、日本の男たちの揺れる現状が見えてくる。

男性性 (masculinity)

男が男であって女ではないことを示す「何か」のこと。「男のあり方」を指す学術用語。それは、生物学的に決定されているものではなく、文化によって異なるし、時代とともに変化する。また、同じ時代の同じ社会の中でも、男性性は一つではなく、複数ある。たとえば、権力を握り、社会を支配する、いかにも男らしい、主流の「男のあり方」は、覇権的男性性と呼ばれる。これに対して、全然男らしくないが、確かに女ではない、非主流の「男のあり方」も、やはり男性性の一種である。それが、差別され、抑圧される「男のあり方」であれば、従属的男性性と呼ばれる。

沼崎 一郎 (東北大学大学院教授)



- 多賀 太 著
- 世界思想社
- 2006年初版
- 1,800円(税別)



- ボー・R・ホルムベイ 作
- エヴァ・エリクソン 絵
- ひしきあきらこ 訳
- BL出版
- 2004年初版
- 1,200円(税別)



パパはジョニーっていうんだ

この絵本は、両親が離婚したため、しばらく会えなかった父親と久しぶりに会った「ぼく」とパパとの心躍る1日が描かれている。「ぼく」は、初めて会ったお店の人など会う人全てに、「ぼくのパパだよ。ジョニーっていうんだ」とパパを自慢して紹介する。離れて暮らしていても、パパは「ぼく」のことを愛してくれている。その事実は絵本の中の親子の表情からも偲ばれるが、夕方になり別れるときのパパのセリフからも切なく伝わる。パパは見も知らぬ電車の乗客に、「ぼく」がしてくれたように息子の自慢をする。「この子はぼくの息子です。最高にいい息子です」と。

一緒に暮らせない厳しい現実も、父親の愛情を確認することで受け入れられ、乗り越えられるのだと思う。離婚しても逢いに来て、堂々と見知らぬ人に息子を自慢し、あふれる愛情を注ぎ、子どもへの責任を果たす。なんと素敵な父親だろう。日本ではどうか。私の知り合いの男性は、浮気が原因で離婚したが、「娘にも妻にもあやまらなかった。男の沽券がする

から」といいつつも、「今どうしているのか」と涙を流して会うことのない娘を案じていた。「男の沽券」のために、娘にあやまったり苦悩する姿を見せなかった父親が、もしこの絵本を見ていたとしたら、どんな選択をしたのだろうか。

男の沽券

「沽券」とは、土地や家屋の売り渡し証文のことで、「売券」や「沽却状(こきゃくじょう)」ともいわれる。江戸時代頃から、沽券は「売値」の意味で用いられるようになり、さらに「人の値打ち」「品位」などの意味で使われるようになった。そこから、プライドにかかわることを「沽券にかかわる」、人の値打ちが下がることを「沽券が下がる」というようになった。(語源由来辞典より) 厚労省2006年度調査によると、過労が原因でうつ病などの精神障害になり自殺した人は、過去最多の66人で内男性が65人という。自殺者に男性が多いのは「男の沽券」に縛られている日本の男性の抑圧を物語ってはいないだろうか。

草谷 桂子 (児童文学作家)

新刊・新着本紹介



- 植物と帝国**
抹殺された中絶薬とジェンダー
- ロンダー・シーピング 著
 - 小川眞里子・弓削 尚子 訳
 - 工作舎
 - 2007年初版
 - 3,800円(税別)



- 日本古代女性史論**
- 義江 明子 著
 - 吉川 弘文館
 - 2007年初版
 - 9,500円(税別)



- 生きる勇気と癒す力**
50歳の女性を生きる女性のためのガイドブック
- エレン・バス+ローラ・デイス
 - 原美奈子・二見れい子 訳
 - 三一書房
 - 2007年 新装改訂版
 - 5,500円(税別)



- 移住女性が切り拓くエンパワメントの道**
DVを受けたフィリピン女性が語る
- カラカサン反差別国際運動 日本委員会 編
 - 解放出版社
 - 2006年初版
 - 1,200円(税別)



- 「あたりまえ」が難しい時代の子育て支援**
地域の再生をめざして
- 小川 清美・土谷 みち子 著
 - フレーベル館
 - 2007年初版
 - 1,200円(税別)



ジェンダー・エッセー

「ジェンダー・フリー」をめぐる状況

北九州市立大学基盤教育センター教授(副センター長) 言語学(生成文法理論) 漆原 朗子 (うるしぼら さえこ)

東京都による国分寺市「人権に関する講座」への上野千鶴子氏任用拒否問題から1年余り、「ジェンダー・フリー」へのバックラッシュは鎮静化するどころか、「産む機械」発言まで飛び出し、政府の煮え切らなさはいうまでもなく、議論の中で各種メディア、とりわけインターネットのチャットやブログサイトでのフェミニストへの攻撃はとどまるところを知らない。

この用語については、1994年にアメリカの教育哲学・フェミニズム理論研究者Barbara Houstonが用いたgender-free対gender-sensitiveの誤解釈により、混乱が深まったといわれる(山口[2004, 2006]参照)。

社会的に広く認知されているジェンダー(gender:文化的・社会的に規定された性別/性役割)という用語は、本来、文法/言語学用語である。世界の諸言語には、名詞と共に冠詞・形容詞・動詞などがその名詞によって特定の形態をとる「一致(agreement)」が義務的な言語があり、そのような区別(男性/女性/中性/通性など)を持つ言語における「性」概念を表す語なのである。それが、1960年代以降の第二波フェミニズムの理論化の過程において、社会学的概念を表すために転用され、今日では敢えて「文法性(grammatical gender)」と限定する「逆転現象」すら起こっている。

一方、-freeはwithout(～なしの)という意味を担う接尾辞として用いられることが多い(例: error-free, smoke-free, stress-free)。このことがgender-freeの日本の解釈とあいまって、あたかも例えば「ひな祭り廃止論」「男女同室更衣」を推奨するのではないかという流言等につながっているのかもしれない。

しかし、多くのフェミニストが繰り返しているように、原義と日本での用いられ方の齟齬はともかく、「ジェンダー・フリー」が目指すところは一度として男女同質とか、男女の差異をなくすべきであるといったことではなかったのである。むしろ、「いま、ここ」に厳然として存在する身体性をステレオタイプや社会的規範なしに



受け入れ、種々の場面において不問にすべきという姿勢を指す用語として用いようとしたのである。

それでは、一種「手垢のついてしまった」ジェンダー・フリーに代わってそのような意味を示す用語はないのだろうか。一部で用いられるgender-neutralは、実際の用法やアメリカの言語学者Susan Fischerとの私信から判断すると、多くは「文法性(gender)に関して中立的な」という意味に用いられる。むしろ、英語では、gender-blindという語がより多く用いられている(Susan Fischerに確認・山口[2004]も同様の観察)。これこそ、身体的差異はもとより文化・社会によって構築された差異を不問にする姿勢をより適格にとらえていよう。なお、この用法が本来は視覚障害に用いられたcolor-blindに適用されると、「民族的偏見なしの」という意味に拡張される。ただし、今度はblindという語自体がはらむ問題もあり、一筋縄ではいかないというのが正直なところである。

【参考文献】

- 1 双風舎編集部(編)『バックラッシュ!—なぜジェンダーフリーは叩かれたのか?』2006年、双風舎。
- 2 山口 智美「『ジェンダー・フリー』をめぐる混乱の根源(1)&(2)」『くらしと教育をつなぐWe』2004年11月号、2005年1月号。
- 3 山口 智美「『ジェンダー・フリー』論争とフェミニズム運動の失われた10年」双風舎編集部(編)『バックラッシュ!—なぜジェンダーフリーは叩かれたのか?』2006年、双風舎。

北九州市立
男女共同参画センター

ムーブ

〒803-0814 北九州市小倉北区大手町11-4
Tel: 093-583-3939 Fax: 093-583-5107
ホームページ http://www.kix.or.jp/move_we
E-Mail move@move-kitakyu.jp

Cutting-Edge 第27号

【編集・発行】 発行日 2007年6月10日
発行 吉崎邦子
編集協力 女性学・ジェンダー研究ネットワーク
編集 力武由美
発行 北九州市立男女共同参画センター「ムーブ」
印刷 (株)エディックス

※本誌は再生紙を利用しています。